



Data	2023-76
監督・脚本：マリヤム・トゥザニ	
出演：ルブナ・アザバル／サーレフ・バクリ／アイユーブ・ミシウィ	

👁️👁️ みどころ

脚線美を強調したチャイナドレスは有名だし、『若き仕立屋の恋』（01年）も有名だが、カフタンって一体ナニ？モロッコのことは『カサブランカ』（42年）しか知らない日本人は、まずそこからお勉強を！

次に、モロッコ出身のマリヤム・トゥザニ監督に注目！日本初上陸のモロッコ映画『モロッコ、彼女たちの朝』（19年）で何ともシリアスな問題提起をした彼女は、本作では何と“ゲイ”をテーマに、中島みゆきの大ヒット曲『糸』（01年）を彷彿させるストーリーを紡いでいくことに。

しかして、本作最大の注目点は主人公が精魂込めて仕立てる“青いカフタン”だが、ストーリー構成の伏線になるモロッコの公衆浴場（ハمام）やモロッコ式のお葬式にも注目！

■□■ “カフタン”ってナニ？その魅力は？■□■

1980年にモロッコで生まれた女性監督マリヤム・トゥザニは、『モロッコ、彼女たちの朝』（19年）（『シネマ49』117頁）でデビューし、多くの賞を受賞した。それに続く長編2作目となる本作でも、前作に続き、アカデミー賞国際長編映画部門モロッコ代表に選ばれたからすごい。しかし『青いカフタンの仕立て屋』の“カフタン”って一体ナニ？

去る4月24日に観たウォン・カーウアイ監督の『若き仕立屋の恋 Long Version』（04年）では、中国の美人女優コン・リーが着るチャイナドレスがなんとも魅力的だったが、“カフタン”とはモロッコで母から娘へと世代を越えて受け継がれている伝統的な民族衣装らしい。中島みゆきのヒット曲『糸』では、“縦の糸はあなた、横の糸は私”と歌いながら、繋がる男女の恋がテーマにされていたが、本作の主人公であるカフタン職人ハリム（サーレフ・バクリ）が仕立てるカフタンの特徴は、何よりも金の刺繍。なんと、それが今ド

キ、ミシンではなく彼の手で一針一針縫われているからすごい。もっとも、そうなると、カフタン一着を注文してから受け取るまで、一体どれだけかかるの？1ヶ月、2ヶ月？それとも半年？いや1年・・・？

■□■前作に続くモロッコ映画の問題提起は？■□■

日本初上陸のモロッコ映画たる前作で、マリヤム・トゥザニ監督は、臨月の腹を抱えて美容師の職を失った若い女と、夫を失ったことで笑顔も失ってしまったパン屋の女主人の2人を主人公に、何ともシリアスな問題点を突きつけた。今の日本では、シングルマザーに何の抵抗もないが、アラブ社会では父なし子（＝ふしだら女）は以ての外だから、タイトルこそ『モロッコ、彼女たちの朝』と美しいものの、彼女たちの立場や生き方は大変だった。

キレイな顔に似合わず（？）鋭い問題提起をするマリヤム・トゥザニ監督の長編第2作たる本作も、『青いカフタンの仕立て屋』とタイトルは上品だし、ハリムが縫うカフタンも美しいものの、そこで提示されるのは何と男同士の同性愛＝ゲイだからビックリ！もっとも、本作前半は、カフタン作りに忠実な職人ハリムと共に仕立て屋を切り盛りする、しっかり者の妻ミナ（ルプナ・アザバル）が登場し、ハリムとミナは家庭でも職場でも仲良くやっているから、中盤から“そんな展開”になっていくことにビックリ！

■□■今ドキ、仕立て職人を志望する若者は？■□■

気楽で自由に働けるバイトならいいが、住み込みで厳しい修行の“仕立て職人”など、まっぴら御免！それが、日本と同じく今ドキのモロッコの若者の常識らしい。しかし、今ハリムの下で黙々と仕事に励んでいる若い男ユーセフ（アイユーブ・ミシウィ）は、ハリムの評価では上々らしい。しかし、経営者としての現実的な視野を持つ（？）ミナは「どうせ長く続くはずがない」とハナから当てにしていないから、ある日ストックしていたはずの生地がなくなると、即「犯人はユーセフだ」ということに……。そんなミナに対してユーセフは何も反論しなかったが、それを「わかっているよ」というような温かいまなざしで見守っているハリムの表情には、私には到底わからない“ある感情”が・・・？

私の子供時代は、家庭ごとに風呂はなく、家では行水、外では銭湯だった。そして、それは学生時代も同じだった。しかして、モロッコにも“ハمام”と呼ばれる共同浴場があるらしいが、その生態は？そこに2人で入っていくハリムとユーセフは・・・？

■□■夫婦の愛はあっても、それ以外に・・・？■□■

『若き仕立屋の恋 Long Version』で見た仕立て屋には数名の職人がおり、主人公になった職人はそのうちの1人だった。それに対して、本作に見る仕立て屋はハリムとミナ夫婦の共同経営で、ハリムを補助する職人はなかなかいい人が見つからなかったらしい。そして、「それは一体なぜ？」という内幕（？）が、ミナのユーセフに対する（厳しい）対応の仕方を見ている中で少しずつ分かってくるから、それに注目！

ハリムとミナの夫婦仲は一見何の問題もないように見えたが、実はハリムは「伝統を守

る仕事を愛しながらも、自分自身は伝統からはじかれた存在であると苦悩していた」らしい。しかし、それは一体なぜ？ちなみに、日本では去る6月21日に閉会した通常国会の終盤に、「LGBTなど性的少数者への理解増進法」が成立したが、これは政府与党が大幅に野党案に妥協をした（丸呑みにした？）結果だ。私はそんな法案にあまり興味はないが、さてハリムは・・・？

■病が悪化する中、女ゴコロの変化は？■

本作途中からは、店を切り盛りする“しっかり者の嫁”とばかり思っていたミナが意外にも病に侵されており、余命が心配される状況であることが描かれてくる。ミナは愛する夫を1人残すことだけが気がかりだったはずだが、他方で、ハリムの美意識に共鳴するユーセフに対して嫉妬心を抱く自分にビックリ。「私がユーセフに対してあんなにきつく当たったのはそのせいなの？」そんな自問自答をしながら、徐々に病を悪化させていくミナの2人の男たちに対する気持ちの持ちようは・・・？

私にはそんなミナの女性心理（女ゴコロ）はよくわからないが、そこは心理描写の巧みな女性監督マリyam・トゥザニのこと、少ないセリフの中、美しいカフタンの完成に向けた作業と並行させながら、ミナの心の中を見事にスクリーン上に表現していくので、それに注目！

■モロッコ式葬儀とは？青いカフタンの役割は？■

『若き仕立屋の恋 Long Version』は、金持ちのパトロンを持った女のわがままでチャイナドレスを何着も仕立てていたが、本作でハリムが仕立てるカフタンは青色の一着だけ。しかも、その完成が近づいた時には、ミナの命も尽き果てようとしていたようだ。

私は本作中盤ではじめてモロッコ式の葬式風景を見たが、それに何の意味があったのかは、本作ラストのシークエンスを見れば明らかになる。モロッコ式の葬式が火葬か土葬かは今なお分からないが、死者の身体を清めて棺の中に入れるのは日本と同じ。したがって、その作業が終わった後は、夫といえども死者の身体に触れることは禁止されているはずだ。ところが本作では、その作業を行った2人の女性に対してハリムが「出て行け！」と命じた後、何やら1人でゴソゴソと……。その作業の最初はミナが着ていた衣装を脱がせることだったから、アレレ……。こりゃ、ひょっとして……。

なるほど、本作ラストのシークエンスがこうだと、『青いカフタンの仕立て屋』という邦題になおさら納得感が……。それを手伝うのは、いったんハリムの店から離れていたユーセフだが、モロッコの葬式では2人の男が死者を入れた棺を前後で肩に担ぐから、どうしても人手は2人必要。そんなラストの風景はタイトルからは意外なものだが、本作に関しては、なるほどと納得！こんな形で精魂込めて仕立てた青いカフタンが役に立てば、ハリムもカフタンの仕立て職人として大満足だろう。

2023（令和5）年6月23日記